

金光大神における“戦争” 一戦場からの声を聴きながら—

高橋昌之（金光教教学研究所所員）

はじめに

■なぜ、金光大神と戦争の関わりを研究しようと思ったのか

・今年「金光大神における“戦争” 一殺し、殺される事実への念慮を介して—」（紀要『金光教学』65号）を発表。

□私自身は戦後生まれ（昭和47年）で直接的な戦争体験を持っていない。

→今年は戦後80年の節目。しかし世界では戦火の止む時が無い。

→戦中・戦後を生きた両親から戦争の話を聞かされ、戦争への嫌悪感を植え付けられる。

□しかし一方で、戦争反対を唱えるだけでは済まない現実もある。

→先の大戦で、金光教は信心の真価を賭けて戦争に協力した。

→今の時代から「金光教は戦争協力すべきでなかった」と言って済ませられるか？

□戦争の反省的物言いには、歴史的後知恵が働いていないか？という指摘

「戦争という現実に見るべきは、信心として戦意発揚をしている、していないの問題ではなく、戦意発揚をしなければならなかった現実にあっての信心の問題ではないか」*1

→戦時下にあって金光教は、戦意高揚を図りながらどう信心を語ってきたのだろうか？

→この問い合わせが、どれほど自分自身に突きつけられる問題となっているのか…

→現代の世界でも宗教が戦争を追認している例は多数。

□今回の論文では、本教信仰の淵源である金光大神にまで遡って検証

→私たちが無意識に抱いている「（他の者とは違い）金光大神は戦争ではなく平和を望んだ」という思い。

→実際に検証しない限り、これは私達が金光大神に抱く願望に過ぎないのではないか*2。

→金光大神にまで遡って検証することで、私たち自身の信心も根本的に問う必要がある。

（論文を書きながら、私自身が先の思いに囚われていることを思い知ることに）

□この講演でお話すこと

①日清・日露戦争の時、金光大神の教えはどのように語られたか？

②幕末維新の動乱期、金光大神が広前を訪れる人との関わりで当面した問題とは？

I 日清・日露戦時における金光大神の教え

■日清戦時における説教と傷病者慰問

- ・明治27年8月に日清戦争が勃発。近代の日本が初めて経験した本格的な対外戦争。
→神道金光教会も国家の施策に協力。

□日清戦時における説教 一動員される金光大神の教え一

- ・神道金光教会では開戦直後に、本部教長（金光大陣（金光萩雄））が説教を行う^{*3}。
- ・前線の兵士を支えるための心構え。貯蓄の奨励、軍資金の献納などを説く。
→具体的な戦闘場面を想起させながら、聴く者に切迫感を与える語り方。
(例：兵士が家族の心配をすれば「(軍刀の) 切っ先が鈍る」といった表現)
→戦争に協力して「天皇の恩」に報いるのは、金光大神の教えに応えるのと同じという。
(「神国の人々に生れて神と皇上との大恩を知らぬこと」)
→あらゆる面から生活を戦争に献げるべく、本教は金光大神の教えを動員していった。
→教内各位から軍資金献納。日朝事変戦勝祈願祭、武運隆昌祈願祭など執行。
→戦況が進むにつれて、戦死者の招魂祭の執行や負傷者への慰問など恤救活動が盛んに。

□国家による武力侵略と金光大神の教えの結びつき

- ・佐藤範雄と畠徳三郎の二人が清国での傷病者慰問に派遣される（明治28年3～4月）。
→神道金光教会および日本赤十字社岡山支部の正・副慰問使として。
・この慰問は将来の布教も見据えられていた。
→本教の勢力範囲拡大が、国家による武力的侵略と密接な関わりを持っていた。
- ・畠が記した「日清戦争慰問日誌」には、近代化に立ち後れた清国の描写が散見する。
→家畜の糞尿で悪臭を放つ街路や「不潔」な住宅。未発達な医療や教育など。彼らは教化の対象と見做される。
→畠だけの問題ではなく、本教が清国に向けていた優越意識が如実に現れている。
→現地住民を伝染病から救う様子等が、軍関係者から二人に伝えられる。
- ・行く先々での軍関係者による歓待。朝鮮や清国に対する植民地支配の正当化。
→戦争による人々の苦難から二人の目が背けられる。信心への思いが確固となる様子。
→国家による武力侵略と、金光大神の教えの結びつきを強めた一因となっている。



慰問使記念撮影（明治二十八年三月十五日）
向って右 畠副使（二十九歳） 左範雄（四十歳）

■日露戦時における戦争の意義確認とつまづき一

- ・明治37年に日露戦争が勃発。金光教ではいち早く国家への協力が打ち出された。

□説教に現れる人命軽視の論理

- ・金光教では全国に講師を派遣して説教を実施。佐藤範雄は講師の一人。

- ・日清戦争での勝利を経て、金光教ではさらなる国民の奮闘を呼び掛けた。
- ・「五万や十万の陸軍は打死するとも、五隻十隻の軍艦は沈むとも、夫れらに頓着せず」*4
→この言葉は、金光教本部が定めた「訓示要領」に記されていた。
- 日清戦争での勝利が戦争に対する抵抗感を和らげ、敵味方の生死への感性が低下。
- 勝利のためには人命を軽視してもかまわないとする論理が見える。
- 佐藤において、信心と戦争の関係とは？

□金光大神の教えを広めること自体が目的に

- ・佐藤は日露戦争開戦の前年（明治36年）に「衛生訓」という題で説教を行っている*5。
→「御地内」「御土地」が皆「天地金の神」の守護の元にあるとのおさえ。排泄物等でみだりに汚すこと強く戒める。
→その大きな理由の一つに挙げるのは、各地で流行を繰り返していた伝染病の予防。
→「御地内をみだりに穢すなよ」との教えを守り、金光教信者として社会に範を示すよう聴衆に語る。
→佐藤と畠は日清戦争の慰問時に、伝染病で苦しむ多数の傷病兵や現地住民に接した。
- ・ロシアとの戦争に勝つことは金光大神の信心により、当地の人々を救うとの信念に繋がった可能性。
→しかし、そのためには多数の兵士や住民の犠牲を無視する事になる。
→金光大神の教えを広める事自体が目的化。その目的に沿って救われるべき人間を選別するという、信心上の大問題が。
→佐藤一人の問題に矮小化してはならない。金光大神の教えを動員して戦力拡充に貢献しようとした本教全体の問題として考える必要がある。
→当時の教内における戦争の受け止めとは？

□金光大神の教えによって押さえ込まれた、人々の感情

- ・当時の教内誌（『令徳』『みかげ』）より
- ・日露開戦直後から、国家と天皇のために命を投げ出すことを信心に重ねる言説多数。
- ・戦況が進むにつれて、無事を伝える戦地からの手紙が盛んに掲載され始める。
→その殆どが、戦場で奇跡的に重傷を免れたことを感謝するような靈験談。
→兵士の家族らを幾分かでも安心させようとする編集側の意図。
- ・しかし、やがて戦争の非人道性や暴力性を隠しきれなくなる。
→遺族への返還を待つ遺骨や遺髪を前に、言葉を失ったという兵士の言葉。
→模範的な言説からすれば異質な死への感覚が表出している。
→公的な国家の理論で埋められない、遺族の心情があふれていた証左。
→その裂け目を覆うように繰り出されたのが、金光大神の教え（「神国の人々に生まれて神と皇上の大恩を知らぬこと」「信心してまめで家業をつとめよ君の為なり國の為なり」）だった。

- 人々の感情を抑え込み、命を投げ出させる最後の一押しに教えを利用。
- 教団の主導者らも人々の間に湧き出していた感情を感じ取っていたに違いない。
- ところが、その主導者の中に生まれた感情すら、自ら金光大神の教えで押さえ込んでいたのではなかったか。
- 私自身は論文を書きながら、ここに信心が持つ言い知れぬ恐ろしさを感じた。

II 幕末維新の動乱期における金光大神と「御上」

■世の中の安定と領民の犠牲

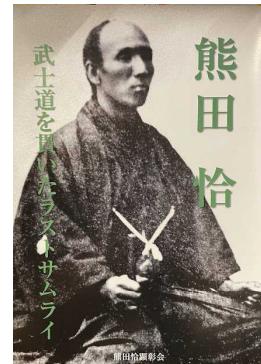
- ・幕末維新期には金光大神の住む大谷村の近辺でも争乱が続発した。

□浅尾騒動 一戦いの場に巻き込まれる領民への眼差しー

- ・中でも地域に大きな衝撃を与えたのが、いわゆる「浅尾騒動」だった。
- 慶応2年4月、長州藩の浪士らが浅尾藩の陣屋を襲撃。浅尾藩は大谷村の領主（「御上」）。
- 陣屋の警護に駆り出された領民たちが死傷する事態に。
- 金光大神は神の命により「御上」（浅尾藩）の安心を祈念（ここには領民も含まれる）。
- ところが「御上」が長州藩への防御を固める動きの中、領民が戦場へ送り込まれる事態が生まれる（人馬の供給、兵糧の運搬など）。
- 金光大神が「御上」の安心を祈ることと、領民の身の安全とが相反する事に繋がる。
- ・「御上」による世の中の安定を願う金光大神
- 子息（浅吉、萩雄）らは「御上」に仕官し、命を賭ける覚悟を自らに強いていた。
- 金光大神も子息らの犠牲を覚悟させられていた。
- 一方、領民達は日々の生活を守る中で「御上」に殉じる覚悟を持ったとは限らない。
- だが天災の如く日本を襲ったのが幕末の動乱。その動乱を収めるのが「御上」。
- 図らずも戦いの場に赴く者が現れる事態を、金光大神も視野に認めざるを得なかった。
- ところが、その「御上」自体が大きく揺らいでいくことに。

□「御上」の揺らぎ 一混迷を深める世と金光大神の行き詰まりー

- ・鳥羽伏見の戦いに敗れ、將軍（徳川慶喜）ら旧幕府勢力が一夜にして「朝敵」に。
- 金光大神にとって、「御上」（浅尾藩）のさらに上位に君臨していた旧幕府が「朝敵」。
- 昨日までの正義があっけなく転覆。「正しさ」の分からぬ状況に置かれる。
- その状況下、近隣の玉島では「朝敵」となった備中松山藩と岡山藩とが一触即発。熊田恰（松山藩老）の切腹で衝突は回避。
- 庭瀬藩も「朝敵」の疑いで岡山藩に追討されかける。
- 金光大神は、天皇を頂点に据える新政府軍を「御上」として、混乱の収束を願った。



備中松山藩の熊田恰

→だが内戦状態が続く以上、「御上」の旗色次第で領民や町の未来が閉ざされる。

- ・こうした世の中が安定するには、「御上」のもとで命を落とす領民が生まれる。
→このことは金光大神も認めざるを得なかった。
→難儀な人の助かりを願う金光大神の実存と分裂してしまう。
→暴力が自明の世の中で、金光大神本人にとどても、その分裂は充分に意識されない。
→「天下太平、諸国成就祈念、総氏子身上安全」の幟を立てて日々祈念するようお知らせ（明治元年9月24日）。
→金光大神の信心が、本人にも気付かれないまま行き詰まっていた。
→その後、広前には戦地に赴く新政府軍の兵士らが訪れる。どのような関わりが？

III 広前へ持ち込まれた戦争

■戦地から届けられた声 一金光大神に突きつけられた問い一

□戦地へ送り込まれた男 一金光大神と神の限界一

- ・金光大神の広前には、戊辰戦争に従軍した兵士らが多く訪れた。
→「奥州」の戦いから帰り礼を述べる岡山藩士など。
→彼らの無事を喜ぶ金光大神の姿が浮かぶ。



- ・その一方、金光大神の勧めに従って「奥州」の戦争に従軍した男の伝承もある。

[…] 金光様は、「その方も、なかなかめぐりの深い者であるなあ。けれども、信心は物や金がなくてもできる。親が死んで忌み汚れがあるからといつても、信心はしてもさしつかえない。信心をするのに物や金はいらない。そういう身なら線香を六本買って、二本は天地の親神様へ、二本は先祖様へ、二本は神々様へと言って供えよ。そうしていふうちには、今から半年ほどすると奥州で戦争があって、上から人夫を召される。財産の高に応じて人夫を出すことになるのであるが、金持ちは危ないと言って出ないから、それを代わって出てやれ。今度の戦争は向こうが逃げる一方であるから、危ないことはない」と言われた。すべて、そのとおりに戦争が行われ、人夫が召されたので、その人は代わって出てお勤めした。日に二朱かの日当となり、代わって出てあげた方からももらって、それを元手としてもとの身代となつた。 (理解II 石原銀造3-2~4)

- 伝承に出てくる「四十歳くらいの男」は、不運が重なり財産を失って困窮していた。
→時代社会の波に翻弄されて助けを求める、多くの人々を象徴する姿。
→金光大神は男の立ち行きを神に願いながら、奥州での戦争に「人夫」として従軍し金銭を得るよう勧めた。
→「人夫」は非戦闘員だが、必然的に戦地での殺人や破壊行為に加担することになる。

□出征者が伝える戦地の実際 一生存を賭けた戦いと生活基盤の破壊一

- ・岡山藩士等は金光大神に、自らの手で「奥州」や「函館」の町を破壊したと話す。
→兵士ばかりで無く、領民を含め多数の犠牲者を生み、人々の生活基盤を奪った。
→金光大神は、現地で暮らす人々のことを思わざるを得なかつたと考えられる。
- ・さらに金光大神は先の男に「人夫」としての従軍を勧めた事実と向き合うことになる。
→彼を危険に晒すだけでなく、殺人や破壊行為に加担させた事が浮き彫りに。
→人間同士の争いを前にして、神の限界性も露わになつてゐた。
→巨大な力によって金光大神自身も戦場に引きずり出され、呆然とさせられる姿。
→金光大神が神と共に求めてきた信心の限界が決定的に。

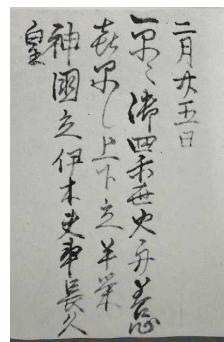
■天皇への信頼と徴兵忌避

□三男宅吉の徴兵忌避 —戦争加担への疑念—

- ・明治政府は天皇を中心とした中央集権体制国家の基礎固めを急ぐ。
→明治6年に徴兵制度の運用を開始。
→地租負担者を除く「余夫」が対象（「戸主」「戸主になりうる者」「戸主に代わる者」）。
- 金光大神の三男宅吉は、「兵隊養子」として古川登免と入籍して徴兵を逃れた*6。
- 金光大神は、いかなる形であれ子息が戦争に加担する事に疑問を感じていたのでは。
→背景には広前を訪れた男に従軍を勧めた経験等。金光大神にとって重い問い合わせに。

□金光大神における天皇への信頼 —疑問を含みながら—

- ・金光大神は、天皇を頂点とした政府軍による世の安定に期待。
→政府軍による西南戦争の鎮圧にも安堵している。
→「覚帳」には天皇が日本を統治することに意味を見る記述も（「覚帳」21-6、「神国（皇）立ち行き」）。
- 金光大神における天皇への信頼が読み取れる。
→ただし維新期の「御上」をめぐる混乱や、海外を見据えた軍隊編成など、天皇への疑問も含みながら。
→宅吉の徴兵忌避には、天皇に向かう金光大神の分裂が現れている。



「神国」の横に「皇」

- 恐らく金光萩雄や佐藤範雄らは、天皇を信頼する金光大神の姿に触れていた。
→彼らの経験が、天皇制国家を崇敬する後の教義化に及ぼした影響がある。
→日清・日露戦争における天皇制国家への追随と金光大神を切り離すことは出来ない。

■今日の私達にとって大切なこと —金光大神と神による信心の模索—

- ・金光大神も時代の限界を生きながら、子息や広前を訪れるものとの関わりで、神と共に信心を模索させられた。その事実を注視していく重要性。
→人を通じて顕れた神の限界性に目を向け、その意味を追究することを介して、神の無限性に触れる可能性。
- ・「人間は神の氏子」の確認

「日天四の下に住み、人間は神の氏子」（「覚帳」11—7、慶応3年11月24日）
→実は、「人間は神の氏子」の確認が神と金光大神にとっても困難な現実。
(もっともシンプルに見えて実際には難しいこと。自国第一主義など分断をあおる言葉が社会で受け入れられる今)
→この確認が神と金光大神によって切実に求められ、私達に託されているに違いない。
→遠く暮らす人々に対する私達の想像を鍛え、平和を展望する力となるために。

*1 大林浩治「高揚感に満ちた「お道ぶり」「道伝え」を求めて」（「シリーズ・教義を考える」『ひろば』94号、金光教西近畿教務センター、2005年、30頁）。

*2 橋本雄二は『金光教教典』の編纂過程における差別用語の扱いを検証し、同様の問題を指摘した（「『金光教教典』の編纂とその受容—表象しがたい「救い」をめぐって—」紀要『金光教学』第64号）。

*3 金光大陣「日清宣戦大詔説教 上巻」『日清宣戦大詔説教 全』明治27年

*4 佐藤範雄『軍国に対する国民の心得 説教筆記 完』安部喜三郎（編集発行）。

*5 『説教十座 完』金光教本部、明治40年。

*6 斎藤東洋男「明治前期大谷村における徵兵について」紀要『金光教学』第12号、1972年。